

平成 29 年度第 1 回新潟市文化創造推進委員会 会議録

開催日時	平成 30 年 3 月 20 日（火）午後 3 時 10 分～5 時
開催場所	新潟市歴史博物館みなとびあ 2 階 セミナー室
出席者	<p>【委員】（50 音順） 今井美穂委員、太下義之委員、角地智史委員、迫一成委員、田中久美子委員、丹治嘉彦委員、能登剛史委員</p> <p>出席 7 名 欠席 4 名（石田美紀委員、伊藤聡子委員、濁川博委員、村山和恵委員）</p> <p>【オブザーバー】 新潟県文化振興課長補佐</p> <p>【事務局】 文化スポーツ部長、文化政策課長、文化創造推進課長、文化政策課長補佐 アーツカウンシル新潟</p>
傍聴者	0 名
報道機関	0 社
会議内容	<p>1 開 会 （司 会）</p> <p>ただ今より、平成 29 年度第 1 回新潟市文化創造推進委員会を開催いたします。</p> <p>委員の皆様におかれましては、お忙しい中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。</p> <p>私は、司会を務めます文化政策課長補佐の南雲でございます。よろしくお願いたします。</p> <p>本委員会は、公開の会議とさせていただいております。会議録作成のため録音しておりますので、ご了承ください。</p> <p>はじめに、委員の変更についてご報告させていただきます。一般社団法人日本旅行業協会関東支部新潟県地区委員会より、大谷剛史委員に替りまして、濁川博委員に就任いただきました。</p> <p>なお、本日は、石田美紀委員、伊藤聡子委員、濁川博委員、村山和恵委員はご欠席でございます。</p> <p>次に、配布資料の確認をお願いいたします。次第に資料名が載っておりますが、まず資料 1 「新潟市文化創造交流都市ビジョン 成果（アウトカム）と成果指標について」という A 3 横のものでございます。資料 2 「新潟市文化創造交流都市ビジョン 成果指標について」、これも A 3 横 1 枚のものでございます。資料 3 「アーツカウンシル新潟の活動状況」、これも A 3 横 1 枚のものでございます。資料 4 「平成 29 年度アーツカウンシル新潟 成果検証について」です。参考資料を四つほどご用意させていただきました。参考資料 1 「新潟市文化創造交流都市ビジョン 概要版」、カラー印刷のものでござい</p>

ます。賑やかなカラー印刷のものでございます。参考資料2は「事業評価の考え方」です。参考資料3「アーツカウンシル新潟中長期計画」、最後に参考資料4「beyond2020 プログラム申請案内」ということでつけております。参考資料4につきましては、本日ご説明いたしません、政府が進める文化プログラムでアーツカウンシル新潟が認証を受付しております「beyond2020 プログラム」の申請のご案内のチラシと、それから文化庁が構築している文化情報プラットフォームのパンフレットとなりますので、後ほどご覧ください。

それでは、ここからの進行につきましては、太下委員長にお願いしたいと思っております。太下委員長、よろしくお願いいたします。

2 意見交換

(1) 新潟市文化創造交流都市ビジョンの成果検証について

(資料1、資料2、参考資料1、参考資料2)

(太下委員長)

ここからは進行をさせていただきます。最初に、「(1) 新潟市文化創造交流都市ビジョンの成果検証について」、事務局よりご説明をお願いいたします。

(事務局)

新潟市文化政策課の長浜と申します。よろしくお願いいたします。

皆様のごところに、参考資料1ということでビジョンのカラーコピーが配られているかと思っておりますけれども、こちらのビジョンにつきましては、今年度、平成29年度から平成33年度までの5年間の計画の期間としております。今回は、その先も見据えながら、段階ごとに成果を設定して、その計画の評価というものもしっかりと行っていきたいと考えております。通常の行政計画の場合は、実施事業に対して参加者が何人だったかや、何回実施したかなど、いわゆる直接の結果というものを評価の対象にするということがほとんどなのですけれども、今回のビジョンの推進にあたりましては、その直接の結果というものはあくまでも「アウトプット」であって、その「アウトプット」を経て人々もしくは社会にもたらす影響、例えば初めて文化芸術活動に参加する人の割合がどのくらい増えたかというような、いわゆる「成果（アウトカム）」というものを評価の対象にしていきたいと考えております。

この文化の分野におきまして、このような評価システムが定番となっているようなものがないと私どもでは認識しておりますし、なかなか難しい部分があると思うのですけれども、今回のビジョンの検証にあたりましては、アーツカウンシル新潟にご協力いただきながら、試験的になるかもしれませんが、このような考えで評価をしていきたいと考えております。

それでは、資料1をご覧ください。こちらの表でございますけれども、これは私どものこのビジョンの3つの基本方針に対する8つの施策を評価対象の単位として、各施策の方向性ごとに「成果（アウトカム）」と、その成果が

どの程度達成されたかを計るための「成果指標」というものについてまとめたものになります。こちらにつきましては、庁内の関係課で構成するワーキンググループでいろいろとアイディア出し、意見交換を行いながら、アーツカウンシル新潟の杉浦さんのご協力を得ながらまとめたものとなっております。

はじめに表の見方でございますけれども、一番左の列「目標」と書いてあるところが、私どものビジョンの「施策の方向性」というところを記載しております。次の右隣の「実施事業 (Activities)」の列は、実際に新潟市で実施する事業の特徴的なもの、すべてというわけではありませんけれども、例示としていくつかの事業を挙げているということになります。その隣の「直接の結果 (Outputs)」というところは、その実施事業の結果でしょうか。例示にないものも含め、事業を実際にやった際に直接もたらされる結果ということで、例を記載しております。主に参加者の数ですとか、公演の数ですとか、定量的な項目となっております。その隣の「事業の成果 (Outcomes)」、これは短期、中期、長期と3段階に分かれておりますけれども、ここが目標を達成すると社会にどういう変化が起こるのか、それによってもたらされる利益を「成果」として、少し太い字で記載しております。ここでは、成果が表れる時間の長さですとか影響する範囲がそれぞれ違いますので、3段階に分けて記載しているというところでございます。一番右側の二重線で囲まれた「成果指標」という列は、それぞれの成果を達成したことを判断するために必要な評価基準、成果の指標としてこういうものが考えられるのではないかとということでまとめたものになっております。

数が多いので、具体的にすべては説明できませんけれども、いくつか説明させていただきますと、この1ページ目の一番上、「基本方針1」の「(1) 市民が主体の文化芸術活動への支援」というところでは、一つ目の行になりますけれども、「子どもや高齢者、障がい者などすべての市民が、気軽に文化芸術を鑑賞・創作・体験・発表できる機会を充実します。」という目標に対しまして、アウトリーチ事業などの実施事業から事業の実施数や参加者数の増加など直接の結果を経たことで、市民の文化芸術への興味が高まり、文化芸術への裾野が広がり、ひいては地域の文化度が上がるという成果が表れるのではないかと整理しております。この成果が達成されたかどうかを実際に判断するための成果指標といたしまして、①で書いております「①鑑賞行動：市民自体の参加 (享受)」というもののほか、「⑧多様性、寛容性：障がい者・高齢者の参加 (社会包摂)」、それから「⑨教育：子ども・親の参加 (教育)」というものを設定したらどうかと考えているところでございます。

それから、2枚ほどめくっていただきますと、「基本方針2」というページがあるかと思います。この「基本方針2」の「(1) 新潟市らしい文化を国内外へ発信」というところにつきましては、例えば一つ目の行でございますけれども、目標が「交流人口拡大につながる潜在性が高く、新潟市らしさを際

立たせる『みなとまち文化』、『食文化』、『マンガ・アニメ』を中心に戦略的なプロモーションを国内外に展開します。」とビジョンで掲げておりますが、これらの文化を際立たせる事業を実際に行い、アウトプットとして戦略の立案や戦略的プロモーションの実施数の増加など直接的な結果を経ることで、新潟を知る、興味を持つ人が現れ、さらに新潟のファンが増え、最終的には新潟に集う人が増えるというような成果につながるのではないかと整理いたしました。この成果に対する成果指標といたしましては、新潟がどの程度知られているかを見る「④ブランディング：外部の評価（都市格）」というものと、人が集まることで経済に波及するということにつながるだろうということで考え「⑥経済・雇用：創造企業の育成（経済）」と設定したらどうかと考えたところでございます。

もう1枚めくっていただきますと、「基本方針3」というものもございます。こちらについても同様でございます、「基本方針3」の「(1)文化創造の力を活かした交流人口拡大と地域経済活性化」となっておりますけれども、一つ目の目標である「本市の個性ある文化資源と他都市の文化資源がもつ共通のコンセプトにより『点』から『線』、『線』から『面』へとつなぐ、文化による広域連携を推進します。」という目標に対しまして、実際の事業としてレストランバスなどを活用したコンテンツの開発などを通じて、直接の結果としては見込み客数の増加など、直接の結果を得ることできるだろうと。この結果を積み重ねていくと、比較的短時間で連携による認知度が向上するというような成果が得られるのではないかと。さらにそれが進むと、新潟地域の魅力が向上し、交流人口が拡大すると。その先には、長期的な成果としては、受入体制が充実して、地域活性化につながるというような流れになるのではないかと考えているところです。この成果に対する成果指標としましては、認知度向上という観点から、先ほども話がありましたけれども、「④ブランディング：外部の評価（都市格）」というようなものと、魅力向上によって交流人口が拡大すると考えまして「⑤交流人口：観光集客（都市魅力）」というものも設定したらどうかと考えたところでございます。

今、三つほど説明させていただきましたけれども、ほかの目標等につきましても同じように考えまして、最終的にその成果とそれを計るための成果指標というものを整理した結果が、資料2ということになります。ビジョンの目標としては、もっと数多くあるのですが、先ほど少し具体例を挙げて説明させていただいたような考え方で整理をしていくと、最終的にこのビジョンの成果指標としては、カテゴリーとしては①から⑨の九つのカテゴリーに整理できるのではないかと。それぞれの成果の達成具合を判断する成果指標と、真ん中の列につきましては、一つのカテゴリーにつき概ね三つの定量的なものと、定性的なものを交えて設定してみたというところでございます。その成果指標を具体的に把握する方法として、一番右の列になりますけれども、このような方法が考えられるのではないかとということで、把握方法

の例をこちらに記載しております。

今日、委員の皆様からいろいろとご意見をいただきたいと思いますと考えておりますのは、この資料2に整理した成果指標のカテゴリーとその隣の視点というものがこういったものでよいのかどうか、また、その成果指標がこういった項目でどうかと。それから、把握方法などについても、一口にアンケートと簡単に書いてありますけれども、これを最初と最後にアンケートを取るとするのはなかなか大変な部分もあつたりしますので、何かいい把握方法などがあれば、そういうアイデアなどについてもいただければありがたいと思っております。

今日、皆様からいろいろとご意見をいただいたうえで、改めて達成度をしっかり計れるものであるかどうか、またその把握方法というものが具体的にできるか、現実的にできるかどうかみたいなものを私どもで考えさせていただきまして、正式に成果指標を設定して、判断基準とする値を収集、設定していきたいと考えておりますので、忌憚のないご意見をお聞かせいただければと思っております。私からの説明は、以上でございます。

(太下委員長)

ご説明ありがとうございます。こういう評価は非常に大事だと言われていますが、こういう形でアウトカムまでしっかり考えて、そして代理指標まで考えていこうというかたちで、実際に評価する自治体は、私が知っている限りではないので、もしこれを実際にやっていくとなると、新潟市が第一号になるのではないかと思います。「新潟方式」と呼べるような、そんな大きなことではないでしょうか。ぜひよろしければ新潟県でも採用していただいて、同じ新潟なのでそのまま使っていただいて大丈夫です。

とは言え、すごく難しいと思われたところがいくつかあるのではないかと思いますので。もちろん、資料に書かれている項目数が非常に多いので、全容の理解が少し難しいということもあるかもしれませんが。もう少し個別に言うと、資料2で見たほうが分かりやすいかもしれませんね。こちらにまとめてあるのです。資料2で見ると、結局この真ん中にある成果指標というところで計っていこうということになっているわけです。けれども、少し考えていただくとすごく難しいということがわかると思います。具体的には、そうは言っても因果関係がそれだけでわかるのかというところで多分引っ掛かると思うのです。特にこの成果指標案の項目案として非常に大きなものを捉えようとすればするほど、その因果関係の把握が難しいのです。

例えばですけれども、中ほどに「外国人入込客数」とありますね。当然、これは新潟市の文化的なイメージが世界に発信されて人気が高まると、結果として多分外国人がたくさん来るでしょうということです。そういう気はするのですけれども、逆に考えて、外国人観光客が増えたら、それは文化政策の成果なのかというと、100パーセントそうはいかない。だけど、何となくそうかなというところがきっとあるだろうという。厳密には言えないのです。

どちらから辿っていても。この文化政策をやったから必ず外国人が増えるとは言えないですし、増えるだろうと思ってやったとしても、その因果関係はなかなか実証しづらいのです。例えば、新潟に来る外国人を全員つかまえて、文化が気になったでしょうか、一人一人に聞いて、しらみつぶしにその割合が増えていくということを経年変化で把握していけば、もしかしたら把握できるかもしれないけれども、それは全然リーズナブルな方法ではないので、実際に因果関係を把握するのは相当難しいですね。

ただ、今日、ご議論いただきたいのは、何となく腹落ち感があるかどうかというところですね。または、これはあまりに論理が飛び過ぎているのではないかという点です。ロジック的に関係が飛び過ぎているとか、そういうものがあれば、それは違う項目を考えたほうが良いと思います。または、もっといい指標があるのではないかとか。新潟でやっている文化政策の成果というものを端的に把握できる指標が他にあるのではないかということがあれば、もちろんそれで良いと思います。そういう観点でご意見をいただければいいのかなと思っております。

これは難しいのではないかというのは、もちろんそのとおりのので、そういったご意見よりは、私はこういう指標のほうが良いと思いますというのが一番優等生な意見という形になります。

では、私から一つだけ質問して、その後皆さんに伺いたいと思います。資料2の「⑦企業CSR」の項目の一番上の成果指標に「実行委員会構成における企業数」と書いてあるのですけれども、この実行委員会というのは何のことでしょうか。

(事務局)

こちらの実行委員会につきましては、文化芸術活動を行う際の実施団体として、一つの会社が単独でやるのではなくて、いくつかの企業が集まって実行委員会という形を組んで文化芸術活動を進めていく際の実行委員会ということでイメージをしております。ですので、その実行委員会にいろいろな企業が入ってくださるということになれば、それが一つの指標にはなるのかなと。協働が進んでいるということで、指標にはなるのかなということで考えたところがございます。

(太下委員長)

それぞれの企業は、実行委員会に入らず単体でメセナ活動していてもいいわけですね。

(事務局)

そうなりますね。この1番目の実行委員会については、先ほど説明した、どちらかと言うと文化活動の実施団体としていろいろなところが一緒になってやってくれるのがいいのかなという話になりますし、単純なメセナとか何かという話になると、その次の企業協賛というところもございますので、そのことの違いをどう見るのかということがあるのかなと思っております。

(太下委員長)

こだわるわけではないのだけれども、多分、一番ストレートな指標というのは、2番目にある企業協賛の数であって、無理やり実行委員会に変えなくてもいいのではないかという気がしています。もし敢えて言うのであれば、新潟エリアの企業メセナの協議会組織をつくりますと。そして、そこに加盟している企業数が徐々に増えてくるというのであれば、一つの指標になり得るのかなという気はしますけれど。あとは、敢えて地域メセナということで、新潟全域を対象としての企業メセナの組織をぜひアーツカウンシル新潟の皆さん中心につくっていただくとか。

ほかにありますか。

(迫委員)

よろしくをお願いします。

目標がどれも変だなと思いながら。

(太下委員長)

目標が変ですか。

(迫委員)

機会を充実するのか、充実した機会をつくるとかなら分かるのだけれども。例えば資料1の目標とかで。

(太下委員長)

左側のほうですか。これは、もともと誰かが決めた目標なのですね。

(事務局)

そうですね。

(迫委員)

とは言うものの、これだともう少し基本理念から構築しているけれど、こちらだともう少し中身があるなという感じがするのですけれども。全体にやろうとしているところ、満足度であったり充実度というものをどこかで計ればいいと思うのですけれども、それがいろいろなところはないと思って。

(太下委員長)

それは、多分、成果指標としては、もっと中身があったほうがいいのではないかと。

(迫委員)

満足度が5段階評価で5の割合が高いとか。数というのはけっこうハッキリだということは皆感じているので、この数はどうせあれとあれを足したのでしょうかみたいな、大体皆そう思っているんで、それよりも満足度が高くて、参加人数は10人だけれども、満足度が90点の人の割合、100点に近い人が多いということを行ったほうが、新潟という都市だと魅力が上がるかなと。それが、これで目指したいところなのではないかというところをこまごまと書いているのではないかと。

(太下委員長)

そうですね。具体的な把握方法を考えていかなければいけないのでしょうけれども、市民アンケートまで想定しているのであれば、満足度も項目として入れてもいいかもしれないですね。

(迫委員)

そうですね。私たちが新潟のADC（アートディレクターズクラブ）をやっている、アーツカウンシルにお世話になって、アンケート調査をやってみてよかったです。満足度をまず聞きたいと思ったので、5段階評価で。けっこう4、5が多くて、これはもう完全に満足度が高いという言い方ができるので、そういう取り方をアンケートに入れていくということをする、見えるというか。数は少なかったけれども。

(太下委員長)

質的な評価ですね。

(迫委員)

そのほうが有意義ではないかなということ、全体を見て思いました。

(太下委員長)

今の迫さんみたいなご意見をぜひお願いします。ほかにありますでしょうか。

逆に、今日の委員のメンバーは、ご自身でも文化プロジェクトに携わる方が多いので、評価と言うとすごく難しいような気がしますけれども、ご自身がやっていることをこう評価してもらおうとすごく嬉しいみたいな観点で考えていただくと、よりポジティブな感じにご意見をいただけるかもしれません。

(角地委員)

資料2の8番の項目にある「⑧多様性、寛容性」のところについてなのですが、その視点として障がい者と高齢者の参加という、参加に割と軸を置いている成果指標になっているのかなと思うのですが、参加から多様性と寛容性が生まれるのかなというところも少し気にかかるというか。ツイッターなどを見ると、きっとあそこにはいろいろな立場の人がいて、障がいの人も高齢の人もたくさんいるわけなのですが、多様性があるか、寛容性があるかという、そうではないみたいな。だから、参加だけを促していっていろいろな人が集まってきた場が、結果的に寛容になるかというところでもないかなと。

現状、平日の図書館とか、ものすごくいろいろな人がいるのですが、そこが理解の場になっているかというところでもないという気がする、どちらかという、参加はカテゴリー1の「①鑑賞行動」の中にも入るかなというところがあって、多様性、寛容性については、障がい者・高齢者との交流とか、障がい者・高齢者への理解とか、そういった視点になるのかなと思いました。

(太下委員長)

これは、先ほどの迫さんのご意見に近い、より質的な部分をいかに評価す

るかというご意見ですね。ちなみにこの項目で言うと、質問というか、コメントですけれども、「⑧多様性、寛容性」の2番目の定量の「障がい者・高齢者の自発的な事業数」とありますけれども、これは逆に言うと、普通にやると高齢者や障がい者は自発的ではなくてやらされ感をもって参加しているということが裏に隠されているということなのではないでしょうか。単なるコメントですが。

いずれにしても、多様な人が集った結果、寛容性に対する理解みたいな、先ほど角地さんがおっしゃったような、質的な変化が起こるような部分も何か把握できるような形にもっていったほうがいいですよ。もちろん、なかなか把握が難しいですが。

(迫委員)

質問なのですけれども、団体アンケート調査というのはどういうものなのではないでしょうか。団体へのアンケートですか。

(事務局)

そうです。ただ、アンケートというのはここにたくさん書いてあるのですが、先ほども実際にできることとできないことがあるだろうと言ったのは、定期的にアンケートを取っていくことがどこまでできるか。イベントごとにアンケートを取るの、それはできると思うのですが、こういう項目で、何年に1回定期的にアンケートを取っていくということが継続的にできるかどうかという問題もあるので、本当はアンケートではなく別の方法とか、もしくは普段のアンケートがそれにつながっていくとか、何かいい方法を考えないといけないことも中にはあるのかなと思っていて、とりあえずは手軽にと言うと申し訳ないのですが、やるならアンケートかなと書いていますけれども、そのあたりもこうやれば取れるのではないかと、いいアイデアがあればお聞かせいただくとありがたいというところもあります。

(迫委員)

そのアンケートの面倒くささというのは、紙を配布して、書いてもらって、回収するという手間が面倒ということでしょうか。コストですか。

(事務局)

いえ、面倒くさいというよりは、費用面ですとか、何をやるにしても多分お金がかかるということが出てくるので。逆にこうやればお金をかけずに定期的にアンケートが取れるとか、何かあればそれでもかまわないのですけれど。

(アーツカウンシル新潟)

今、お手元がないのですが、本冊の参考資料で、この指標をつくるにあたって、「文化に関する市民アンケート」をやっているのです。これが限界で、実はこれでできる範囲でということで、指標を考えているのです。お金をかけないでという話と、このくらいは頑張ってくださいという感

じなのです。だから、抽出が 3,000 で、回収数が 3 割くらいなのです。

(太下委員長)

毎年やるのか、二、三年に一回やるのか分からないけれど、そういうことはできるでしょうと。

(アーツカウンシル新潟)

そういうことは何とかやりたいという中で、ただ、そうではないでしょうと。指標をとるのだったら、もっとこういうやり方でやってくださいとガツンと言ってくれば、もしかしたら課長が頑張るかもしれない。

(迫委員)

Google などで行えるような形で取るとすれば、簡単にアンケートが取れて、費用もかからないわけではないですか。年代別にアンケートの手法というか、例えば年齢の高い人は紙だし、若い人は Web だし、もっと若いとスマホだしとかいうような、方法というか、やり方を年齢別に変えるとかということも手かもしれないとか、回収率を上げたいのであれば。

(太下委員長)

きちんとした市のアンケートで大事な調査なのですよとくると、けっこう真面目な人が答えてくれるけれども、何となく常にネットでやっても、またかみたいな感じになってしまい、すごく変わった人しか答えないという現象が起こってしまいますね。

(アーツカウンシル新潟)

Google のアンケートというのは、誰にいつているか、新潟市内とカテゴリーを切ったとしても、どういうサンプルかということが、すごくバイアスがかかるのです。

(迫委員)

だから、その場所とかシーンで、学校でやるとか、授業中にとか、何とかに集まっている人たちという中でやっていけば、拾えるのかなと。

(太下委員長)

団体に関しては、仮に新潟市の助成とか、水と土の芸術祭みたいな事業でいろいろな団体とかかわるといって想定した場合、そもそも団体概要の申請にこういう多様性に関する取組みみたいなものをあらかじめ組み込んでしまうと良いのではないのでしょうか。過去 1 年間の実績みたいなものを端的に指標化して書かせるようにしておけば、助成金の申請とか事業の参加のたびにデータは取れるかもしれないですね。助成金が欲しいからきちんと書きますとか、何かインセンティブがないとだめかもしれないですね。

(迫委員)

そうですね。何かポチポチみたいなものだと送料とか回収費がかからないわけなので、答えたら 100 円が税金から引かれるとか。

(太下委員長)

集計も、(アーツカウンシル新潟) 杉浦さんのところだと、人件費がすごく

高いので。

(迫委員)

何か手があるのではないかと。

(事務局)

多分、そこも項目によってくるのかなと。今の団体アンケートみたいなどころですと、ある程度団体というものが何となく絞れてくるというか、そういうことで先ほど太下先生が言われたような方法も取れたりするのでしょうし、そうでない項目になってくると、どちらかと言うと社会の変化みたいなものを見ていきたいというと、より男女、年齢にかかわらず広く取りたいみたいところがどのような形で担保していけるかとか、そういうことも多分出てくるのだろうということもあって、その辺がなかなか難しいところがあるのだろうと。取り方を、「この取り方」と「この取り方」で、というように、いろいろ組み合わせることで、何かそれができれば一番いいのかなとは思いますが。

(太下委員長)

具体的な把握方法は、今後詰められるのですよね。

(アーツカウンシル新潟)

ある程度考えて。

(太下委員長)

そうだけれども、ここは、今日はあくまで例示なので。

(事務局)

これでやるというものでは、決めているものではないので。

(アーツカウンシル新潟)

こういうことを知りたいということをごんごん出していただいたら、我々も参考にします。

(太下委員長)

それを、また具体的に考えるのですね。

(迫委員)

ついでにというか、水と土の芸術祭があつて、ショップやお店をやらせていただくのですけれども、前回の、どういう人が来ていたのですかというものを教えてくださいとって、出てきたものが非常に有意義でないデータというか、受付でアンケートに答えてくれた人からしか入ってきていないので、客層もすごく上がっているし、もっと若い人も来ていたよねとか、だから意味がないのですね。次に活かしているのですかというのと、活かしていませんという話だし、だから、非常に大事なことのだけれども、そこが追求できていないので。データの公平性ということよりも、次に生きるアンケートをやったほうがいいという気がしますので、何かそういうものができたらいいですね。

(太下委員長)

実際に来ている人の年齢層とか性別とか、ある中間時点だけでもどうしても把握したいのであれば、アンケートではない方法がいいでしょうね。

(迫委員)

そうですね。ピッピとカウントする形で。

(太下委員長)

ほかに何かご意見はございますでしょうか。ちょっとしたコメントでもいいです。

この資料2の「①鑑賞行動」の3番目の「家庭内で文化芸術が話題になる頻度」というのは、そうなのだろうかと、確かにこういうことがあるといいなと思うのだけれども、若干余計なお世話感がありますよね。

(アーツカウンシル新潟)

全体として、今まで芸術文化に触れてこなかったというか、こういう市の助成金をもらってこなかった人、もらっていないけれども活動している人とか、今までの市の施策が届いていない人たちの意見をどううまくどう取り込むのかということ、この指標を考へるときに一番重視したのです。だから、けっこう分からないところもあるのですけれども、先ほどの質的な評価ですとか、満足度とかというものも、予算があればやりたいと思う項目なのですが、予算のことは置いておいて、そういったこういうものが取れたらいいなという、逆にご意見をたくさん聞かせていただくと、精査もしやすいかなと思うのです。

特に芸術文化が好きだという人以外の意見を取りたいのです。だから、例えば家庭内で文化が話題になる頻度というのも、芸術文化の有識者とか市民懇談会とかではなく、普通の行政懇談会のようなところでそういう話を聞きたいのです。

(迫委員)

成果指標なので、もっと柔らかい書き方になったらいいなと思って、「家庭内」というのを「お家(うち)」でという響きが違う。文化芸術というのも、「何か見ましたか」とか、「映画及び」とか、「劇場などに行きましたか」という書き方になると、こういう書き方になると「やっていないな」と思うけれども、言い方が変われば「やったな」となると思うので、難しく言うところだけでも、柔らかく言うところだとしておけば、数字が上げやすいのではないかという気がしました。構成員とはあえて言わないようにするとか、そういう方がいいかなと。

「③市民アイデンティティ」のところが難しいですね。地元就職率、特に、「できれば帰って来たいと思っていたか」みたいな、「機会があれば帰って来たい」とか、「出るけれども帰って来るつもりだ」とか、何かそういうものが拾えると面白そうだなと。逆に「富山よりは好きだ」とか、「自分は愛している気がする」というような、比較対象を設けて勝ちにいくというか、弱い敵を探すとか言っては悪いですが、そういうのも面白いのではないかなと。

(太下委員長)

高校を卒業するタイミングで新潟を離れる方がけっこう多いのではないかと推測しますので、高校生の新潟の文化に対する理解度とか、愛着とか、多分そういうものが10年後、20年後のUターン率に効いてくるような気がしますね。

(丹治委員)

今までの流れとは少し違う視点から発言させてもらって、空気が読めないのかと怒られてしまうのかもしれないのですが、資料2の①から⑨までの項目を辿りながら、今話している具体的なものがどう市民に到達するかという構造的なことと言うと、今、この場でやっていることは、オール新潟での発言であれば私はすごく有効だとは思いますが、例えばここで⑤の交流人口であったら、これは国際課の皆さんとの協調が必要だと思うし、あるいは企業であったら、これはどこに当たるのでしょうか。例えば⑧であったら、これは福祉課との連携である。特に⑨などは、教育委員会との協調性がないと、これすべては到底できない。例えば学校関係との連携がないと、こういうことは我々もできないと思うのです。同時に、これらの案件が制度的にできましたといっても、例えば大地の芸術祭とか、瀬戸内国際芸術祭までくるとフレームが大きいのですけれども、大地の芸術祭だとこれらの案件が、例えば隣の、行政の方々の顔が見える範囲の中でやり取りされますよね。例えば教育委員会だったら、机二つ隣の中でやり取りができると思うのですが、けっこう新潟市というのは無駄に大きいというか、大きい単位で動いていることを考えると、これも一つ一つそれぞれの課との連携が密になって行われないと、なかなか難しいかなと。素晴らしい手法を挙げても、それがどれだけ響くのかなという、構造的なことがまず一つの肝になってくるような気がします。少し視点がずれて申し訳ないです。

(太下委員長)

いえ、大事な意見です。どうですか。具体的な把握方法で、ほかの課の名前も一部挙がっていますけれども、その辺の今後の協力の見込みは。

(事務局)

そうですね。ワーキングの中でいろいろな課にかかわってもらっているので、そういう形でフィードバックやかかわり合いはあると思うのですが、私もこれを見たときに、1番目の「①鑑賞行動」は別としても、それ以外の項目というのは、別に文化の計画だからこのカテゴリーにするというわけではなくて、これは縦割の弊害なのでしょうけれども、各部門でつくっている計画もこのカテゴリーで、成果指標のところは若干変わるところはあるかもしれませんが、本来であれば、先ほど丹治先生がおっしゃったように、オール新潟のいろいろな計画をするときのカテゴリーというのは、もしかするともう10個、20個あって、文化はそのうちの10個で見ていこうとか、産業であればこのうちの15個で見ていこうとか、若干この成果指標の観光だ

とこのようにすべてにかかわるものは、恐らくいろいろな計画のところにかかわってきてトータルでここにつながっていくのだろうとか、そういうものになっていくのが本来は理想なのかなと感じたところは正直あります。

ただ、ここまでの成果指標をすべての計画でやっていこうというところまで、新潟市はなっていないので、まずは文化の部門で実験的にこういう形でやってみたらどうかと。そして、これを参考にほかの計画にも波及していければ、新潟市としてもよくなっていけるのかなと考えたところは正直ございました。

(太下委員長)

まずは文化振興をオール新潟市でやっていくと。

(丹治委員)

例えば、手続きの中になるのだけれども、先ほどまったくそうだなと思ったのは、「⑧多様性、寛容性」のところ、文言の、例えば「障がい者・高齢者の参加」で、理解と交流という一文が入るだけで、これは多分福祉課の方々、プロパーもいらっしゃると思うので、その辺とのやり取りをていねいにやることで、また新たな枝葉が見えてくるかなと。だから、「⑨子ども・親の参加」とあるけれども、ここも教育委員会だと、ここは「今の親というのはこんな傾向で…」という専門的な知見の深さをここに盛り込むことができると思うのです。

今、文化創造交流都市ビジョンという形で出ているのですが、手続きの中でもいろいろな方が参画しつつ、ここにいろいろな知恵が入ってくると、より厚みが増すかなという思いで見えていたのですけれども。少し外れていましたね。

(太下委員長)

ぜひ、そういうほかの部署とのディスカッションを通して、もう少し練り上げるということもぜひご検討をお願いします。

(事務局)

私ども、このビジョンを策定し、アーツカウンシル新潟を立ち上げるときに、行政全体で、縦割りではなく横串で文化創造交流都市を目指すにあたって、文化創造推進本部という形で行政の中に本部組織をつくっています。その中で全庁的に文化創造都市を目指そうという体制をつくっているわけですが、そのメンバーでのワーキンググループを通じてこの作業をしてもらっているので、その連携度というか、密接度というものはまだ弱いというところだと思うのです。そのため丹治先生が心配されているのかなと思うのですけれども、一応、枠組みとしてはつくって、それをいかに充実させるかという時期にあり、その対しての外部からの意見ということで、皆さんのこの推進委員会が組織していると、機能しているという関係性になると理解していただければと思います。

(田中委員)

初めての評価ということで、多分、初年度は完璧なものではないのですよね。そういう意味では、単年度評価ということについては、やはりお金をかけないということであれば、参加人数が一番数えやすいのかなど。そして、それは次年度ですね。結局、次年度にリピーターが増えたり、参加者が増えたりすれば、それはおもしろかったという評価になるので、単年度の評価は少し難しいですけども、その次の年度で表れるのかなど思ったりしますし、満足度が知りたいという場合は、出口調査ではないですけども、係が年代別にどういう点がよくなればいいでしょうかみたいな、具体的な、どうでしょうかと言うとよかったですと言うに決まっているので、質問の仕方を変えて、どこがどうなれば来年はもう少しよくなるのでしょうかみたいな聞き方をしていただければ、抽出でも満足度は多少分かるかなど。

初めて参加させるためにはどうするかというのがけっこう大きな問題で、今、公民館がけっこうこまめにあちらこちらにありますので、市報にいがたに載せるだけでは高齢者はなかなか引っ込み思案で一人で行かないということがありますので、公民館活動をしているグループに周知して、一緒に行こうみたいになれば、初参加の方も行きやすい。でも、子どもは別ですよ。子どもは、親が一生懸命にどこか行くところはないかと探していますので、子どもに関しては初参加ということの心配はないと思います。

私の孫の例なのでですけども、正月が終って2週間もして、まだ大雪になる前の話なのですが、何も楽しいことをしていない、行くところがないという話で、大雪になってしまえば雪遊びということもあったのでしょうかけれども、結局関東に行って、キッザニアに行ったりみたいな、遊ぶところを求めて出ましたから。

雪国ならではのジレンマもあると思います。大雪になってしまえば、せっかく催したものでも参加者が少なくなるから、その時期にしたくないということもあるかと思いますが、例えば、子どもは割と風の子で、お母さんたちも若いのです。県になりますけれども、今、県立美術館で光と何とかなの楽しいものがありましたね。あのようなものであれば、新潟市の美術館ではなくても、箱ものの中にそういう楽しいことを。弊害もありました。行ったら必ずインフルエンザに罹ってくるという、でも、子どもはどこかに行けば必ず罹るのですから、そういうことを恐れているのは、予防注射をしていればそれほど重篤になりませんので、雪国ということをもう少し考慮して、関東に逃げないように、そして新潟でそういう子どもも楽しいということになれば、若い人の定住人口も増えるかもしれませんので、新潟の雪国の特性というものも考えていただきたいと思います。

(太下委員長)

ありがとうございます。ぜひ、そういった点も考えていきましょう。

ほかに何かございますか。

(今井委員)

成果指標については、もう私から見ると、本当に細かくなっていて、せっかくこれだけしっかりした取組をするのなら、もっと打ち出し方を面白くしたほうがいいのではないかとこのころで、先ほどから予算がという話がありますけれども、それは承知のうえで、私はアプリとか、もっと市民が使いやすいものがあるといいと思ひまして、そのアプリを一つつくるというのも、せっかく交流都市ビジョンという軸で各団体がつながるきっかけができてるので、それをまとめるアプリをつくって出すことで、例えば私も使う側としたら、来週はこういうイベントがあるのだとか、来月はこういうイベントがあるということを知りやすく見ることができるだけで、このサイト、このアプリを見れば、新潟でこういうイベントがあるということが分かることが行動につながるのかなと、私の世代はけっこう感じていることが多いのではないかとと思ひまして、このアプリ、お金はかかるにしても、今後ずっと使っていくと考えたら、このアンケートもそこに盛り込むことができますし。例えば、最初は自分のプロフィールを打つことで、女性で、何十代で、子どもがいる。それに合わせたアンケートが取れるとか、それに合わせたイベントの情報が提供されるとか、そういうサービスを使うことでこういう取組がもっと市民に分かりやすく伝わっていくのではないかとと思ひたので、ぜひ、先ほども新潟初になるのではないかとおっしゃられていたので、そういう面白い取組で、せっかくやるなら全国に注目されるような取組になればいいと思ひておりますので、いかがでしょうか。

(太下委員長)

ありがとうございます。ユーザーの視点で見ると、今の今井さんの意見、例えば新潟の文化的なイベントに関してそこにアクセスすると常に分かるというためには、イベントカレンダー的なサイトがあるとすごく便利ですよね。

(今井委員)

それから、コレクターの皆様には、このイベントはマストでコンプリートしたほうがいいみたいな、表になっていると、次はこれをやっていこうみたいな。初心者からすると、そういうものはやりやすい目標になるかなと思ひます。

(太下委員長)

そういうことをやるためにも、新潟が文化的にアクティブにならないと、コンテンツがないといけませんね。鶏が先か卵が先かみたいな話ですけども、いずれはできるのではないかなと思ひます。どちらかと言うと、行政がやるというよりは、多分、民間のビジネスでそういうものができるような気がしますね。

(丹治委員)

先ほどの構造的なことで疑問があったのと、それから、アウトカムの部分での疑問があって、それは、最大公約数をここで見ようとしているのかなというイメージがあるのです。どうしてもアンケートとか、あるいはその事業

に参加したことの成果であったりとか、それを拾い集めるための手段としてアンケート等がここで用いられるというのは分かるのですが、例えば「⑧多様性、寛容性」のところでは障がい者・高齢者の部分で、例えばある一人のおじいちゃんをずっと追いかけるとか、あるいは一つの事業をずっと追いかけることで見えてくるいろいろな問題や、あるいは成果というものが出てくると思うのですね。例えば、先ほどのアプリ、私も最近アプリというのはいかなど、歳をとってくると段々そういうものが難しくなっていて、高齢者であったり障がいを持っている方がそういうものに辿り着けるかどうかということ、リアルタイムに見られるかもしれないけれども、やはりなかなかできない方も中にはいらっしゃる。社会的な問題も含めて。そうしたときに、こちら側がそういう方々に寄り添いながら成果を見させていただく。あるいは成果を築くような仕組みが必要なのかなという気がします。当然、大きいパイがあるが故に、そこにカッコ付けは必要だと思うのですが、そこに入らない方々、あるいはそこに参加したけれども、それをどうこちら側で見守り回収していくかという作業も、もちろんお金の問題もあるかもしれないけれども、寄り添う姿勢が必要なのかなという気がします。

(太下委員長)

ありがとうございました。特に8番とか9番、または3番でしょうか、これにかかわってくるご意見かと思うのですが、事務局案は定量評価をなるべく多くしようという考えがあるような気もするのですが、定性的な部分でエピソード評価的なもの、本当に訴えかけるようなエピソードみたいなものが各カテゴリーにあると、いいかなという気がしますね。それと定量とかと両輪になるのではないかという気がします。

(迫委員)

これは、それぞれによってアンケートの仕方は変わると思うのですが、始めと前で同じものを作って数が増えたかというやり方ですか。

(太下委員長)

項目によっても違うのではないのでしょうか。

(迫委員)

そうですね。質問の中で、前に比べてどうですかというような質問はあり得るのですか。けっこうあるのですか。

(事務局)

はい。

(迫委員)

そういうものがあるのであれば、分かりやすいし大体よくなるのではないかというか、いろいろなところでいろいろなことがやられているからだと思うのですが、どんどん生活が充実しているというか、いろいろなイベントがあったり、便利になったり、もう十分だなと思ったりもするのですが、そういうものが増えているので、自分の中で過去と比較させれば大

体よくなっているなという気がしてしまうのですけれど。

(太下委員長)

とりあえず今回やってみますけれども、経年変化をどう見るかというのは、別の次元で難しい問題があるのです。というのは、例えば、たまたまですけれども、「①鑑賞行動」の1行目にある「文化芸術に初めて参加する人の割合」というのは、仮に新潟市の文化政策がすごく充実して、どんどん初めての人にもアプローチしていったら、その割合はどんどん減っていくはずですよ。そして最後はいなくなるはずですよ。

経年変化をどう見るかは、今後考えていきましょう。

(能登委員)

非常に頭を悩ませながら見ていたのですけれども、今ほどの太下さんからのお話で、経年変化は別でということと言われていたもので、そうかと少し納得したのですけれども、先ほどのお話に出ていた参考資料2の「アーツカウンシルイングランド」の内容で、内在的効果であったり本質的効果だったり、このような感じで説明されると非常に納得すると思っておりました。今、今回の成果指標についても、今後こういう感じにしていこうみたいな状況なのでしょうか。

(事務局)

成果指標は、あくまでも一番左側にあるカテゴリーを何かの指標で見なければいけないとなったときに何で見たいかということ、今回、ワーキングの意見などを踏まえてこういうものがあるのではないかと考えて設定してみたのですけれども、今ほどいろいろのご意見もいただきましたので、その辺を踏まえて、とりあえずどの視点でスタートするか、スタートするまでに一度見直さなければいけないかなと思っていますし、その後も、その動きに応じて若干の追加や修正というのはどうしても出てくると思うのです。ですので、一回決めたらこれでフィックスですとということには、完全にはならない部分もあるだろうと正直思っています。

(能登委員)

分かりました。今、とりあえずこの案についてでいいのですね。

(事務局)

そうですね。

(能登委員)

少し気になったのは、企業協賛数というものが「⑦企業CSR」のところにあるのですけれども、我々も、アート・ミックス・ジャパンとか総おどりで企業協賛の獲得などをけっこうするのですが、これは営業力によって数字がだいぶ変わってくるのです。そもそも営業していない団体もあつたりして、ですので、これは数値的にはいかなかなというところで、逆を考えると、企業の皆さんがCSR活動をやっているとか、ホームページ上にCSRを謳っているとか、その数が増えているかどうかというほうが、企業が主体的にC

SRをやっているのかとか、ホームページ上にCSRの言葉をつけはじめて
いるとか、どうやって集めたらいいのか分からないのですけれども、そう
いうことのほうが具体的かなとは思いました。

特に民間が主導したり地域の団体が文化活動をしていこうとなると、や
はり企業や地域からの支えというものが、こういったところが非常に大きな支
えになると思うので。

(太下委員長)

ありがとうございました。ほかに何かございますでしょうか。

では、私から。この資料2の「②市民活動」の真ん中で、団体のことをイ
メージしているのでしょうか、**「構成員の人数、年齢構成（若返り）」**
とあるのですけれども、意味は分かるのです。多分、全国的にこういう文化
団体の年齢構成が高齢化しているという。ただ、日本社会全体が高齢化して
いるので、多分、もう若返りはないのだろうという気がするのです。瞬間的
にはあるかもしれませんが。少し中年の人が入ったりすると。だけど、趨勢的
に見ていくと多分若返りはしないので、現状維持が精々だろうという気はし
ています。年を取ることは悪いことではないから。

それから、「⑨教育」の真ん中に、「部活の参加者数」とあるではないです
か。ご案内のとおり、部活というのはこれからやらない方向になるみたい
なので、これは単純に指標として掲げるだけだと、多分長期的に減っていく
ということになってしまうので。私は、もちろん掲げてもいいと思うのですけ
れども、掲げるのであれば何か施策がないといけないと思います。たとえば、
学校にアーティストを派遣する仕組み、それが学校の負担にあまりならな
いような仕組みとか、そういうものがないと、単純に数値を取っていくと、こ
れは指標としてはあまりいい成果、パフォーマンスが出ない指標になっ
てしまうという気がします。

ほかに何かありますでしょうか。オブザーバー、同じ行政の立場で、こ
れは大変ですねとか。

(オブザーバー)

ちょうど同じ時期に県もこういうビジョンをつくりまして、県のビジョ
ンは、本文に成果指標というか、こういうものを目指しますと明記してい
て、そういうときに何をやるかというときに、今までの文化みみたいなもの
だけではなく、交流人口とか経済とか、そういったところも視野に入れな
ければいけないだろうということで、我々が何とか入れることができたのが
観光の入込客数なのですけれども、ただ、それも全部ではなくて、文化的な
イベントだとか、神社仏閣だとか、この中の一部を使う程度にどうしても
絞り込まざるを得なくて、ましてやさすがに企業のところまでいけないとい
う感じはあったので、なかなか意欲的な指標といいますか、やろうとして
いるなという感想を持ちました。

それから、県のものは、毎年アンケートで評価といいますか、経年変化を

毎年見ていこうということで、インターネットで割と簡単にコストをかけずにやれるのですけれども、今回のもので特に気づいたのですけれども、同じ項目で、業者は確かに違って、当然対象になっている人も多分違うのでしょうけれども、年齢構成とか男女比とか、地域構成とか、同じようにやっているのですけれども、今回、なぜか全部があまりよくない結果が出たりして、その分析がなかなか難しかったりして、少しどうしたものかということもあって、これは我々がやっている中での感想なのですけれども、今回これほどたくさんの項目をやるのはなかなか大変なのかなというのが私の感想です。

(太下委員長)

ありがとうございました。なかなか大変なチャレンジだということを確認させていただきましたが、本当に日本初になると思うので、とりあえずこういった形でチャレンジしていったらいいかなと思います。

ほかにこの資料1と2ではよろしいですか。これは通期的なことなのですが、もしこの指標、カテゴリー、視点で何となくいけそうだなという感じになるのだとしたら、逆にいうとこのカテゴリーと視点というのがこういったことなのだよねということになると思うのです。何が言いたいかというと、逆にこういうエビデンスベースで、これから次の計画、目標とかを再構築していてもいいのかなと。どうしても普通に考えると、こういうものはなかなか文言から考えていくではないですか。それはそれで正しいのですけれども、結局分解していくとこういうことだよねということがもし本当なのだとしたら、これはやってみないと分かりませんよ。全然いい数値が把握できないかもしれないし、どうなるか分からないけれども、もしこれでいくのだとしたら、こういう項目がきちんと構成された、ちりばめられた目標が立っているという筋道で計画をつくっていくということもありなのではないかなと。エビデンスベースの構想づくりですね。それを中期的な次の段階で、そういったことも念頭に置きながら、この評価ということをやっていければいいかなと思いました。

もう一つ議題がありますので、続いて「(2) アーツカウンシル新潟中長期計画の成果検証について」、こちら事務局からご説明をお願いいたします。

(2) アーツカウンシル新潟中長期計画の成果検証について

(資料3、資料4、参考資料3)

(事務局)

文化創造推進課長の塚原でございます。よろしく申し上げます。

それでは、参考資料3と資料3と4、これを使いながら説明をさせていただきますと思います。

まず、資料3のA3の1枚のものです。こちらをご覧くださいと思います。まず、アーツカウンシル新潟の活動状況報告ということですが、

平成 28 年度 9 月 26 日に設立いたしました。下半期からの設立ということで、人員体制の表、平成 28 年度の欄にありますとおり、全員で 4 名体制で立ち上げたところでございます。平成 29 年度、今年度に入りまして、プログラムディレクターを 3 名増強して、現在は 7 人体制で運営しております。来年度につきましても、同じ体制で予定しております。

3 番の予算状況ですけれども、平成 28 年度の決算については、約 2,100 万円ということで、半分を文化庁から補助をいただいております。この補助金も平成 30 年度までで打ち切りという基本路線になっておりますので、その後の自主財源の確保についても今検討を進めているところです。平成 29 年度予算は、全体で 5,000 万円、平成 30 年度予算についても、4,850 万円という形で計画しております。

次に、活動状況、右側のページの 4 番になるわけですが、その前に参考資料 3 をご覧いただきたいと思っております。参考資料 3 は、アーツカウンシル新潟の中長期計画、A 4 のホチキス留めになっている資料です。少しページを進めて 4 ページの下の半分をご覧いただきますと、アーツカウンシル新潟の機能ということで、1 から 4 まで四つの機能についてここで謳っております。この四つの機能に基づきまして、この中長期計画の次をめくっていただいて 6 ページの下のほうには、目指すべき方向性ということで、これも四角囲みで囲んでありますけれども、1 番から 4 番まで、方向性にいついて定めているという中長期計画をもっています。

資料 3 に戻っていただきますが、4 の活動状況の表がございます。一番左側の列に示している 1 から 4 は、四つの機能ということで、「市民の文化活動の支援」、2 番として「調査・研究」、3 番「情報発信」、4 番「企画・立案」という四つの機能に基づきまして、平成 28 年度と平成 29 年度、今年度どのような活動をしてきたかということを表にまとめているのが 4 番の表になります。

「①市民の文化芸術活動の支援」につきましては、相談、助成、これが中心になってきますけれども、網掛けがしてある部分に立ち上げ以降の累計の実績も載せてありますが、相談の累計が 222 件ですとか、アドバイスも含めますけれども、助成の件数としては、採択ベースで 49 件、1,300 万円余の助成を行っているということです。それから、先ほど話題にも上がりました「beyond2020」の認証組織としても貢献いただいておりますので、立ち上げ以降の認証件数で、74 件の認証をしていただいております。

次の「②調査・研究」ですけれども、こちらも非常に積極的に取り組んでいただいております、特に二つ目の丸です。市の文化施策の向上に資する調査・研究、人材育成、啓蒙等ということで、市の職員に対しても、アーツカウンシルを立ち上げた際には、そもそもアーツカウンシルとは何かというところから始まりまして、文化創造推進本部のメンバーに対する社会包摂というテーマでの研修会ですとか、文化プログラムにあたっての調査・研究の

協力ですとか、市民向けの人材育成事業についても積極的に取り組んでもらっております。また、文化庁が実施する人材育成事業とも連携をとりながら、貴重な経験の場を新潟市民の団体の方に提供していただいているということでございます。

3番目の「③情報発信」については、2番目の丸のところに「『語りの場』の開催」というものがあります。これは、いろいろなジャンルの著名な方に交渉してお招きいただきまして、アーツカウンシルの語りの場のスペースで、膝を突き合わせて意見交換できる機会を多数設定していただいております。地方版アーツカウンシルの設立というのは、新潟が先駆的な取組だということで、数多くの視察も来ておりまして、今年度だけで視察対応8件ということで、これからアーツカウンシルの設立を目指す団体などから調査に来ていただいております。

「④企画・立案」につきましても、我々が取り組んでいる大規模な文化事業の企画運営に対するアドバイス等、積極的な助言をいただいております。最後のところは、組織の自立化に向けた取組ということで、補助金がなくなった後の組織の持続のあり方ということについても積極的な活動をしておりまして、来年度にはイオンと協力しながら、ワオンカードで買物をしていただいた方の0.1パーセントが新潟市の文化政策に寄付されるという取り組みも、間もなく実現する予定であります。

これが、主な活動実績ということですが、このアーツカウンシル新潟の成果の検証方法についても、今ほど、前段のビジョンの成果と同じ考え方で進めていく必要があるでしょうと。いかにこのビジョンの成果が上がっているか、それに対してアーツカウンシル新潟がどのような貢献をしているかという視点で評価をしていく必要があるということで、ビジョンの評価と連動しながら評価をしていきたいと考えているのが、資料4になります。

この表の一番左の列は、アーツカウンシル新潟の中長期計画における目標ということで、先ほどご覧いただいた後段の四つの目指すべき方向性、これが4項目上がっております。それぞれの項目に対して、ビジョンのどの部分に当たるのかということが書いてあります。項目の下に「ビジョン1－(1)(3)(4)」と書いてありますのは、ビジョンの該当する項目についてこちらに記載しているということです。実施事業(Activitis)には、それぞれ活動項目を入れておりますし、直接の結果(Outputs)についても、先ほど説明いたしましたこれまでの実績等を記入しております。それらが、短期的、中期的、長期的にどのような変化をもたらして、結果として新潟にどのような成果をもたらしているのかといったところで評価をしていこうということで、成果指標につきましても、先ほどのビジョンの指標を基につくっていこうという構成になっております。

先ほど同様、この評価の仕方、それから評価の項目等、ご意見をいただきたいということと、これまでのアーツカウンシルの活動等について、今後期

待することなどについても、本日併せてご意見をいただければと思っております。

今年度の自己評価、それから今後の取組について、杉浦プログラムディレクターからご紹介いただければと思います。

(アーツカウンシル新潟)

改めまして、杉浦でございます。

今年度の自己評価、今年度というか、平成28年度が半年で、ほぼ1年半という中での自己評価と、それから今後のビジョン推進に向けた取組についてですけれども、毒を吐かない範囲でご説明したいと思っております。

資料4ですね。1、2、3、4という目標を掲げているわけですが、1、2、3については、先ほど丹治先生からおっしゃっていただいたように、芸術文化の所管部署だけでできるものというのは、実にはないわけです。例えば1番は社会包摂ですので、当然、福祉関係の部署と連携していかなければいけないですし、2番については、観光であるとか、広報の皆さんとも連携していく。3番については、産業も含めて、それからまちづくりの関係所管課との連携もしながら進めているという状況の中で、新潟市庁内、内部という形で言うと、なるべく各所管課と連携をとるような形にし、先ほどのビジョンに対するご意見もそうですけれども、分野横断的に市の行政スタッフ全般の中に文化芸術がインフラとしてあるというものを目指しておりますので、そういった形での庁内の理解を深めていく。深めていくと言うと格好いいですが、要は存在と顔を知ってもらうというような取組を、1年半はしてきたと。その中で、もともと財団がもっていた助成金、それから今年度新設された、団体の基盤に対する助成金というものを、それから水と土の芸術祭にかかわるような市民プロジェクトに還元するというものを中心に、さまざまな支援を行ってきたというところで、そこが一番の市民に対するフレーズというところを重点的にやってきたというところですよ。

ただ、今年度と昨年度の評価としては、やはり市民に対して助言をすることの難しさというものを非常に感じていて、要は助成金を出して終わりではなくて、助言も含めて言うと、助言ではなくてお小言になってしまうのです。そうすると、嫌がるというか、公募しても応募してこないというようなことにつながってくるということがあります。やはりアーツカウンシル自体の存在を知ってもらうということが、地道な活動としては必要なのかなと考えています。

必要に応じて、先ほど出てきた「寄り添っていく」というようなところをどこまで、寄り添い要員というものを専門的につけられるのかということが一つの課題でありますし、今後必要なことかなと考えています。

2番目の「2. 新潟文化の形成、発信による北東アジアの文化交流拠点都市の形成」というところについては、やはり新潟市がかなりの事業をされていますので、そういったところへの頭出しというものを含めて、外部の人材

のネットワークというものをどのように新潟市に提供していけるのかということがキーになってくるのかなと思っています。その次の項目にも入りますが、例えば鉄道文化を発信していくことを契機にしましょうというような取組をいうのは、自分も持っているネットワークがあれば積極的に提供していくということを進めています。

「3. 文化芸術の多面的利活用による文化交流創造都市・にいがたの基盤強化とブランド発信」という3番目の項目ですが、文化交流創造都市・新潟の基盤強化とブランド発信ということについても、ほぼ同じように、関係所管課に対してどう働きかけていくかということところです。今、迫さんにも協力をいただいています。観光以外の経済的な効果、創造産業といった効果というもの、文化政策の持続性ということにつながっていきますので、そういったところをどのように考えていくかということが一つの課題になっています。

「4. 持続的・自律的なアーツカウンシル組織の確立」ということですが、今、評価の作業をしています。まずはアーツカウンシルというものが市の中で必要なものだ。市の行政サイドの中で必要なものだという認識をもつていただくのと同時に、文化庁からの委託であるとか、そのほか調査委託的なものをより積極的にとっていくということも必要なのかなと考えております。

(太下委員長)

ご説明ありがとうございました。(2)の議題ですね。アーツカウンシル新潟の中長期計画の成果検証について、資料3、4と参考資料3について、何かご質問、ご意見がございましたらお願いいたします。

(迫委員)

私もお試しで活用させていただいているのですけれども、非常に有意義だなと感じておまして、やはり助成金であったり、活動するとき、行政と自分たちで共通言語がなかったりするところを整理してくださったり、もっとこういう可能性があるのではないかとこのころの、何か一つ上のところからというか、情報とプレッシャーと、でもそれをサポートしてくださるとい感じが、ちょうどいい感じかなと私は感じていて、新潟ADC（アートディレクターズクラブ）というデザインのをいろいろやらせてもらっているのですけれども、なかなか使い心地が悪いと思ったり、自分たちが使いやすいように使えたらいいなと思っていたのですけれども、アーツカウンシルは適度に新潟の意義になるような方向と、私たちがしたいことの間みたいところで、いろいろ視察に行ったり、アンケートだったり、勉強会を、最初はそれほどしたくなかったのですけれども、してみたらいいことがあるとか、山形県に行っているいろいろやっている活動や取組を見てくると、すごく刺激になりました。実際にもっと交流していこうという話にもなったので、素晴らしいと思っているのと同時に、けっこう質が高くていろいろポリュー

ムがあるので、これだけやっていたらすごく大変だろうなとか、ですので、これほどの数はなくてもいいのではないかということ、逆に思いました。

(太下委員長)

ありがとうございます。今の迫さんみたいなご意見、いいですね。実際にご自身の活動の中でアーツカウンシルと関わっているケースも多いでしょうから、その感想、ご意見等。角地さんは、何かアーツカウンシルとの接点がありますか。

(角地委員)

実際にお世話になっておりました、ちょうど自分の場合は基盤助成でも使わせてもらって、これまで福祉とアートという中で、障がいという部分だけにアプローチするような取組をしていたのですけれども、そういう助成のお金を使っていたので、福祉とアートの中でも障がいにしかアプローチできないということがあったのですけれども、今回の基盤助成では、すぐに対象を狭めなければいけないとか、すぐに結果を出さないといけない、何かイベントを行わなければいけないというような助成ではなくて、現状、今、新潟にある課題とか、これからの取組のための調査を行うためのお金を使わせてもらえたというところは、すごく自分としては使いやすく、何かすぐに何月の展示会に向けて企画を進めていくというようなお金の使い方と全然違ったということがいいことなのですが、よかったところでした。

(太下委員長)

課題は。

(角地委員)

そうですね。課題はもう一回頭を整理して。

(迫委員)

課題を言っておきましょうか。やはり、アーツカウンシルというのは何か、私もADCでアーツカウンシルというところが新潟市にあって、ここはこうで、いいことだと思うとか、話をするのですが、どうやって伝えていくかとか、「アーツカウンシル」という言葉が出てきて「？」が最初についてしまうと思うので。でも、助成金とか、そういう話になると嫌がる人もいるし、その辺の伝え方であったり、それがあると。助成金は大嫌いというのは、商店街などでも多かったです。その辺の意義の分かりやすい言葉をつくれればいいのかという気がしています。

(太下委員長)

今井さんは、活動上では特にアーツカウンシルとはないのですか。

(今井委員)

はい。私は、直接ないのですけれども、遅くなってしまって、昨日初めてフェイスブックページを「いいね」させていただいて、こういうものがあつたのだよねということに気づかされたということがありまして、私も今まで

の活動の中で助成金を申請したという事例がないのですけれども、この表にある相談件数というのは、思っていたよりもどうなのですか。多いのですか、少ないのですか。

(アーツカウンシル新潟)

どうなのでしょうね。

(今井委員)

これでたくさんであれば、私のようなというか、ポッと何かやりたいと思った人が気軽に相談できるのか、もっと質の高いものなのかという、ハードルが分からなくて。

(アーツカウンシル新潟)

そういう意味で言うと、前は沖縄県でやったのですけれども、それに比べると少ないです。

(今井委員)

では、まだ余裕があるというか、相談件数が増えても対応できるという感じですか。

(アーツカウンシル新潟)

件数的には。

(今井委員)

分かりました。その確認をしたかったです。ありがとうございます。

(太下委員長)

ぜひ、ご相談してみてください。

あまりこういうファンシーな活動は似合わないかもしれませんがね。個人的な意見としては。

田中さんは、特にアーツカウンシルと活動上での接点はないのですか。

(田中委員)

そうなのです。全然ないのです。実は、私、今年いっぱい交替するのですけれども、その次の人も多分利用しないような人なので、失敗したなどと思って、いろいろなことを立ち上げている人がいるので、そちらのほうがよかったかなと、今、失敗したなど。彼女のほうがよかったかなと。

(迫委員)

代表者ではなくてもいいかもしれませんね。相談に行く人は。使う人は。

(アーツカウンシル新潟)

商工会議所でいうと、商工会議所自体との連携はしようと思っけていまして、今、会津若松の商工会議所が戊辰戦争のときの東軍の広域観光連携というものを画策されていて、割と新潟の商工会議所の動きが鈍いので、その辺の話事務局長としようとしているところです。今度、観光部会が会津若松ですので、そういった連携ができるのかなと思っています。

(田中委員)

分かりました。

(太下委員長)

ほかにいかがでしょうか。

(丹治委員)

事業の中身に関しては、本当に皆さんが汗を流して実践されているということが書面ではなくても確認できるのですが、アーツカウンシルの性格自体が、まだ新潟市の、特に文化関係に携わっている人たちに浸透していないというのが実情ではないかなということがあって、これは極論かもしれないけれども、東京のアーツカウンシルとの比較になると全然別物ということにならざるを得なくて、例えば新潟でも一国一城の文化に携わっている人たちの意思が相当強い中で一石を投じるというのは、相当勇気のいることのような気がします。

私も長年いて、最初はそういう気持ちでいても段々目が濁ってきて、相手がこのように思っているのかなみたいところで一步引いたりとか、空気を読んでしまったりとか、そこに杉浦さんたちがインフレームをつくって動くということ自体、ある意味喧嘩を売っているみたいところが当然出てくると思うのです。でも、それはすごく必要なことで、我々がどこかで気づきに至らないといけないところ。当然、その助成の相談、助成のアドバイス、あるいは行動半径を広げる意味でのサジェスションは当然アーツカウンシルの役目とは言いつつも、どこか異分子が入ってくる中でどう受け入れるかという部分も必要なのかなと。アーツカウンシルだけの課題ではなくて、もしかしたら新潟市役所も含め、我々がどうこれを受け入れるかということも、問われているような気がします。

いくつか外からのいろいろな話を聞くと、やはりなかなかアーツカウンシルの性格が判断できない、読めないという方々もたくさんいらっしゃる。当然、その中で私も翻訳作業をするわけですが、もしかしたらその役目というのは、当然、新潟市の役目にもかかわってくるような気がするのです。アーツカウンシルがしっかり動けるように方針をしっかりとさせていただきたいというのが、それが平成 31 年から平成 33 年までの予算が見えないとか、本当に大丈夫なのかなというように。それでなくても今の新潟市の予算はなかなか厳しいという触れ込みがどうしても見えてくるし、その中でこれがぶれると、子どもが動いているわけではないので、見通しもないまま走るというのも相当勇気のいることだし、そこを明確にして、1年間で150万円減って平成31年から平成32年、平成33年と段々減っていきます、人員も減りますなどということは、これから開港150周年があり、東京オリンピックがあり、パラリンピックがありという中で、ここで終るのではなくて、やはり継続的に行政が支援して、アーツカウンシル新潟が全国のアーツカウンシルの中で一番おもしろいねという触れ込みになるように我々も支援していきたいし、あるいは行政も含めて、アーツカウンシル新潟が発展できるような体制が今以上にできればいいような気がします。

(太下委員長)

今後の展望も含めた、非常に総括的なご意見をいただきまして、ありがとうございます。本当にそうですね。

能登さん、いかがですか。

(能登委員)

アーツカウンシルの成果検証についてというところでは、いろいろと情報共有させていただきながら、まだ活用はさせていただいたことはないのですが、いろいろな情報発信などでよくお話を聞いたりさせていただいております。

我々も、にいがた総踊りを立ち上げたのが2002年くらいの初頭だったのですが、当時、にいがたTMOで商工会議所の企業、まちの商店街と行政の間に入ってうまくつなげる役目という機関があって、そこを頼ることによって我々のイベントが非常に推進力があつたというところを考えると、アーツカウンシルはそれに代わるような活動になっていらっしゃるのだなということの一つ思うのと、同時に、この前アーツカウンシルでこれをやりましたよね。シンガポールで、今、新潟大学が国際交流基金の助成金を使って、新潟出身の映画監督が制作したアニメーションのすべての資料をアーカイブして、それを展示会などにしながら学校事業で役立てるという名目で作ったパンフレットがあるのですが、そこにもアーツカウンシル新潟の名前が入っていたりして、世界中に広まっていっているというところでは、非常に評価が高いことになっているのではないかと思います。

ですので、教育機関がそういった文化関係のものをやろうとしたときに、新潟にアーツカウンシルがあるということが、大学のみならず小中高とつながっていけることも、今後の大きな発展の一つになるのだなと感じていました。

(太下委員長)

ありがとうございます。国際的に活躍されていますね。

オブザーバーの立場では、いかがでしょうか。

(オブザーバー)

割と文化というのは、トップの方の意向が強く出ている分野だと思うのですが、新潟県はあまりトップを走っているいろいろなことをやらないところなのですが、新潟市は文化、文化ということで、最初に例えば文化プログラムの認証組織になられたりとか、そういった部分で、我々県はそれほど文化という感じでもない状況なのですが、我々の少し遅れがちのところの先生といいますか、見本になっていただいて、この前も文化プログラムの説明会の講師に杉浦さんから来ていただいたり、そういったことで、今後も一緒に協力してやっていきたいと思っています。

(太下委員長)

ぜひ、今後も連携させていただければと思います。

私からの意見なのですけれども、最後にちゃぶ台返しみたいな感になってしまいますけれども、資料4で、このアーツカウンシル新潟の指標ということでいろいろ書いていただいていますけれども、上からずっと4番の「4. 持続的・自律的なアーツカウンシル組織の確立」というところまでの半ばくらいまでは、先ほど議論した新潟市全体の政策の項目と一緒にすよね。もちろんアーツカウンシル新潟と新潟市の政策というのは一体なのだということで考えると、これはこれでそのとおりだとは思いますが、すごく理屈っぽく言うと、同じだったら、それは政策で評価すればいいと。そのうえで、アーツカウンシル新潟というものを評価するのであれば、その政策、行政との連動性とか、そういったものを計る必要があると思うのですね。

例えば、一つの極端なケースとして、新潟市の文化政策はものすごくうまくいきましたと。だけど、アーツカウンシル新潟は、そこにはまったく貢献していなかったということも、理論的にはあり得ますよね。もちろん実際には、多分、そういうことにはならないでしょうけれども。だから、新潟市の文化政策の評価は評価でやる。だけど、それとこのアーツカウンシル新潟の評価というのは、実は違う指標なのではないかなという気が基本的にはしています。もちろん、ここに書いてある成果指標の文化政策として把握したものというのは、当然アーツカウンシルの成果の一部でもあると思うのですけれども、それは政策評価でやっているのだから、ここで敢えて書かなくてもいいのではないかなと。

むしろここで重視すべきは、先ほどからお話が出ていますけれども、例えば市民の認知度とか。ただ、市民と言っても一般の市民まで浸透するというのは難しいので、例えば、それこそ水と土の芸術祭とかアート・ミックス・ジャパンとか総おどりとか、何か特徴的な大きな文化イベントに参加した市民の中での認知度を把握してみるとか。あとは団体からのご意見、ただ、先ほど丹治先生もおっしゃったとおり、団体の皆さんは独自のスタンスなので、貢献度と言うと「いやいや」みたいな感じになるかもしれませんけれども、寄り添い度というか、受け入れ度というか、「そうは言ってもあってよかったね」という意見を把握するような、うまい聞き方で団体との関係性を探るとか。先ほど言ったように、文化政策、行政との連動性、さらに言うと所管部署以外との連携・成果であるとか。事業のほうには書かれていますけれども、対外的な外部資金を獲得するとか、視察対応するとか、そういうところが、実はアーツカウンシルの評価の第一次資料になってくるのではないかなという気はしています。

ついでにコメントさせていただくと、外部からの視察対応を随分されていますよね。これは、今後、新潟市の文化政策なり、このアーツカウンシル新潟の活動が充実していけば、これは今後伸びていくはずですが、無料で対応しなくてもいいような気がするのです。お金を取っていいと思うのです。その代わりに、新潟市内に宿泊したらタダで対応しますとか。一人1万円

とか一応つけておいて、市内に宿泊するのだったら無料で対応しますとかというくらいでいいのではないかという気がします。イギリスのNPOとかに行くと、それなりの料金を取りますよね。その代わり、きちんと資料キットがあって、対応者がきちんと1時間くらいプレゼンしてくれるのですけれども、そのくらいのコストがかかるわけですからね。

(田中委員)

福岡市も取りますね。

(太下委員長)

そうですか。もう、きちんと取って、その代わり泊まったらタダにしてあげるとかにしましょう。

(迫委員)

上古町も取っています。お金がないので。お金がないというか、時間を取られて。大事な時間と人ですので。割と喜んで来るというか。

(太下委員長)

そういうところを思いました。

ほかに何か、このアーツカウンシル新潟の検証について、ご意見等はございますでしょうか。よろしいでしょうか。

お時間も大体いい時間なので、進行を事務局にお返ししたいと思います。

(司 会)

ありがとうございました。

3 その他

(司 会)

では、次第の3、その他ということで、委員の皆様から事務連絡等がございましたらお願いいたします。よろしいでしょうか。

では、事務局から事務連絡をさせていただきます。本委員会の委員の任期は、今年度末、本年3月31日までとなっております。委員の皆様には、来年度以降も引き続き委員に就任いただきたい旨の依頼をさせていただいておりますが、先ほど少しお話も出ておりましたが、田中委員が今期で委員を替られることになりました。田中委員から、一言いただけますでしょうか。

(田中委員)

ありがとうございました。商工会議所女性会から指名で、何か分からないうちにまいりまして、2年間、的外れなことも多かったと思いますけれども、皆様から寛容に接していただいて、ありがとうございました。今後は、参加者として活用させていただきたいと思います。この次にまいりますのは、副会長で若返ることは確かでございます。本当に皆様のビジョンが成功することをお祈りいたしております。ありがとうございました。

(司 会)

ありがとうございました。

では、ほかの委員の皆様におかれましては、来年度も引き続き委員をお引き受けいただける旨の承知をいただいております。ありがとうございます。

来年度の会議の開催につきましては、改めてご連絡、ご案内させていただきますので、よろしくお願いいたします。

続きまして、事務局の人事異動についてご報告させていただきます。4月1日より、文化政策課長として文化創造推進課の塚原課長が着任し、文化創造推進課長には、現在江南区役所の区民生活課の高野課長が着任いたします。なお、文化政策課の長浜課長は、福祉部障がい福祉課へ、文化政策課の課長補佐の私南雲は、危機管理防災局防災課へ異動となります。大変お世話になりました。ありがとうございます。

最後に、中野文化スポーツ部長よりごあいさつさせていただきます。

(事務局)

文化スポーツ部長の中野です。遅れて来て、本当に申し訳ございませんでした。

今日、市議会の本会議の最終日ということで、来年度の予算案が何とか可決いたしました。新潟市の予算、先ほどから話題にもなったと思いますけれども、来年度は非常に財政が厳しいということで注目されていたのですけれども、そのように財政が厳しいと、やはり一番目を付けられるのが文化といえますか、削られやすいと言いますか、そうになってしまうわけですが、そうではないのだということを主張して、残すべきところはきちんと残すということを主張してやってまいりました。来年度は特に水と土の芸術祭の第4回目を開港150周年事業の主要事業としてやるということで、議会に提案して、いろいろな反対のご意見もいただきましたけれども、何とか認めていただきましたので、認められた以上は何とか成功させるようにこれから全力でやっていきたいと思っておりますので、委員の皆さんからもいろいろご協力をいただくことがあるかと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

遅くなりましたけれども、本当に今日はお忙しいところご出席いただきまして、本当にありがとうございます。スタッフが今言ったように、来年度はけっこう替わってしまうのですけれども、私は来年もまだおりますので、引き続きよろしくお願いいたします。

それから、今日、前半の部分、私は聞けなかったのですけれども、文化に対して厳しい目が向けられているなかで、今回のビジョンをどう評価していくかということが非常に重要になってくると思っておりますので、後で今日の議論の内容を私も聞かせていただいて、来年度に活かしていきたいと思っております。本当に今日はありがとうございます。

4 閉会

(司会)

では、以上をもちまして、平成29年度第1回新潟市文化創造推進委員会を

	閉会いたします。本日は、お忙しいところお集まりいただきまして、ありがとうございました。
--	---